

ジャーナリストの証言（要旨）

フィリップ・ヴァネ

すべての証言の一致するところだが、ジャーナリストの仕事は二つの側面に依拠している。すなわちそれは、見ることと語ることとである。アルベール・カミュは、その生涯の三つの時期においてジャーナリズムに身を投じている。まず最初は、戦前、1938年10月にパスカル・ピアによって創設された「アルジェ・レピュブリカン」紙、そして1939年9月の宣戦布告から1940年1月始めにかけては「ソワール・レピュブリカン」紙に参加している。二番目は1943年に加わった「コンバ」紙。＜解放＞から1947年までは、編集長を務めている。三番目は「エクスプレス」誌。アルジェリア戦争の初期段階、つまり1955年5月から1956年1月まで関わっている。ジャーナリストとしての体験は、カミュの文学作品にも反映している。『異邦人』の中で、カミュは一人のジャーナリストを描いている。他のジャーナリストたちが裁判のもつ事件の社会性にばかり気をとられているのに対し、このジャーナリストは全身全霊の注意をこめて、被告ムルソーを見つめ、ムルソーを理解しようとしているのである。『ペスト』のジャーナリストは誰かといえば、それは実際にジャーナリストとされている人物すなわちランベールではなく、医師リウーなのである。というのも、さまざまな情報源にも基づきつつ、街のすべての住民とともに自分が見たこと、なかんずく自分が体験したことを報告しているのはリウーに他ならないからだ。

ポール・ニザンにとってと同様、後に続いたカミュにとっても、ジャーナリストとは「日々の歴史家」であって、「常に逃れゆく」真実そして隠されている真実を追究しなくてはならない存在である。その際にジャーナリストが手段とするのは、理性と想像力とであり、その力によって、ジャーナリストは平凡な出来事や数字の背後に隠れているものを明るみに出そうとする。ジャーナリストは、自分が取り扱う主題にできうる限り接近する努力を払わなくてはならない。その次には、自分が見たものあるいは自分が理解したことを伝達しなくてはならない。カミュは言葉の適切な選択こそもっとも肝要なことだとしている。それは客観性への気づかいからばかりではない。言葉が人を殺めることもあるからだ。ジャーナリストの仕事とは、万人の名において語ること、あるいは少なくとも犠牲者の名において語ることでもある。そうすることによって、ジャーナリストは公の議論に、換言すれば自国の民主主義と自由とに寄与するのである。ジャーナリストの責任は重大である。

その使命を果すうえで、ジャーナリストはさまざまな障害に出会う。自分の書いたものが時間的な持続性に乏しいといったことさえ障害の一つとなろう。そこでジャーナリストは自分の書いた記事をまとめて再発信することによって、時間的な持続性を延長させようとするのである。二番目の障害は、政治権力や金権という障壁だ。そのためジャーナリストの仕事は、自由を擁護し、多種多様なかたちをとる抑圧や検閲に抗する際限のない闘争の様相を呈してくる。しかしながら、おそらくは乗り越えがたい最大の障害、それは観察者とその眼差しの向かう対象との間に本質的に存在する距離という障壁だろう。事件や事

件に巻き込まれている人々のいずれにせよ外部に身を置いたままでいるというのに、どうすれば可能な限り忠実にそれらのことを伝達できるのだろうか？ この問いかけによって、1956年からカミュがジャーナリズムから一種の離反を示した理由の説明がつくかもしれない。1956年以降、カミュにとって証言は、「自由の証人」である芸術家の方がジャーナリストよりも担うにふさわしいものとなるのである。